

＜日本イギリス哲学会 第69回関西西部会例会 報告要旨＞

報告1： 18世紀中葉のダブリンにおける趣味改良論の形態
——『リフォーマー』を中心に——

藤原 いお

本報告は1740年代ダブリンの演劇論争の各論点の連関を再構築し、18世紀中葉のアイリッシュの言論における趣味改良論の様相を明らかにするものである。

本報告が対象とする「ジェントルマン論争」は、1747年、劇場支配人T・シェリダンと観劇者との小さな諍いに始まったものだが、C・ルーカス、P・ヒファーン、また若きE・バークらが言論に参加し、その論点は、事の発端である劇場の改良を中心としつつも、宗教対立や階級対立などさまざまなテーマを巻き込みつつ展開した。彼らの手による匿名刊行物は、当時のダブリン文壇の関心を顕著に反映した政治的論争のテキスト群として思想史研究で扱われてきた。しかし、これを対象とした先行研究は、アイルランドの中心的問題の一つである宗教対立に関するテーマを追ったものなど、各論に沿ってテキストを裁断的に扱うものが多い故に、各テーマの連関を十分に問うた分析はいまだ存在しないと言える。

そこで本報告は、E・バークと彼の友人らによる週刊誌、『リフォーマー』(Reformer, 1748)を素材とし、その全容を整理する事で以上の課題に応答する。『リフォーマー』は、全13号続き、文芸批評論、演劇—劇場論、農地論、宗教論などについて多彩な話題を提供したテキストである。どの話題も、イングランドとの比較のうちで「文明」後進地域として、「文明」や「趣味」の改良が問題とされていたダブリンの地で盛んに言及された論点であるが、これらの各論について、『リフォーマー』が傑出した議論を有しているわけではない。しかし、「雑誌」として一つの実像を結んだ『リフォーマー』において、先に挙げた論点がどのように配置され、連関しているかを分析することで、著者らがアイルランドで「趣味」を向上するための条件を何に見ていたかを提示できるであろう。

(京都大学・院)

報告 2 : ジョージ・グロートとジョン・スチュアート・ミルによる デマゴグ解釈——ギリシア史受容における弁論術の再評価

村田 陽

本報告では、哲学的急進派のジョージ・グロートとジョン・スチュアート・ミルによる古代ギリシアの「デマゴグ」解釈を分析し、弁論術と自由な民主的統治の関係性を思想史研究の観点から検討する。

両思想家がギリシアの哲学と政治学を積極的に受容したことは、近年の研究で解明されつつある。グロートは『ギリシア史』(1846-56年)でアテナイの民主政史を詳述し、ミルは、同書に対する書評を1846年から53年にかけて複数刊行した。両者は、アテナイの市民が日々の公的事柄への参加を通じて、国制に対する知識と感情を育てていたことを支持した。このことは先行研究でたびたび指摘される一方、民主政を導く政治家に対する解釈には、当時のギリシア史受容をめぐる論争上の観点から検討の余地が残されていると考えられる。

この論争は、哲学的急進派と彼らと対立した19世紀初頭の保守の歴史家たちとの間に見られる。保守は、民主政批判の文脈でアテナイに着目し、ソフィストの教えを受けた非名門貴族の出身者がデマゴグに成り果て、民衆を迎合することでアテナイを衆愚政治へと陥れたと非難した。その代表格が紀元前五世紀半ばに活躍したクレオンであった。

対してグロートとミルは、デマゴグをいわゆる「煽動政治家」ではなく、民主政を健全に活性化させる「反対論者」として評価した。グロートは、クレオンを官職の公的活動を監視し、問責する「中産階級」出身の「野党」的政治家に位置づけた。ミルは、グロートの分析がデマゴグの本質を見抜く議論であると指摘し、クレオンの言論空間における反対論者としての役割を強調した。

本報告の前半では、保守によるクレオン批判と彼の政敵のニキアスを支持する言説を中心に、デマゴグに対する非難を検討し、後半にて、それらの刷新を試みたグロートとミルの議論を比較検討する。その結果、両者が保守の解釈とは異なり、民主政における弁論術とは迎合ではなく、自由な社会を構成する肝要な技術であると捉えていた可能性が示されることになる。

(特別研究員 PD (京都大学))